

協同組合の原点「二宮尊徳の報徳」を広めた安居院庄七

J A はだの 企画管理部長 宮永 均

日本の協同組合運動の先駆けとして、江戸時代後期に報徳思想を唱え、報徳仕法と呼ばれる農村復興政策を指導した農政家二宮尊徳がいます。「至誠・勤労・分度・推譲」を行っていくことで、人は初めて物質的にも精神的にも豊かに暮らすことができるというのが報徳の根本的理論であり、この教えを、静岡県をはじめとする各地で広め実践したのが神奈川県秦野市出身の安居院庄七あぐいしょうしち(1789～1863)です。

飢饉で食べるものもあまりなく、各地で一揆が起っていた時代に、人々が自力で助け合っ、暮らしと村を再建させた尊徳の報徳思想は、“弱いもの同士が助け合っって幸せな暮らしと社会を築く”という相互扶助の考え方であり、今日の協同組合の原点ともいえるものです。

1 二宮尊徳に金を借りに行く

庄七の名前は報徳関係者や彼が活躍した地域の人々を除いてあまり知られていないが、尊徳がここまで慕われ有名になったのも安居院庄七の功績によるところが大きい。

庄七は数え54歳の頃、自分の家の商売に失敗しお金に困っていた。そんな折、二宮尊徳の話が耳に入った。聞けば、無利子か低利でお金を貸し、高利の借金を整理させ貧乏な農民を救済しているという話であった。借金の利子は普通2割以上だが、二宮尊徳が不景気で他人を信じることもできない時期に無利息でお金を貸してくれるのはどう考えてもおか

しい。尊徳は、自分以上の山師で何かを企んでいるのではないかと庄七は思ったが、それでも無利子か低利でお金を貸してくれるなら何とか頼んでみようと思いついた。

当時、二宮尊徳は小田原藩の家老・服部家の財政立て直しに成功し、藩主大久保家の分家で旗本の宇津家の領地だった栃木県の桜町の陣屋にいた。

2 尊徳を訪ね開眼する

庄七は、尊徳を訪ね借金のことなど切り出せないまま、風呂番や掃除などの下働きをして陣屋に厄介になった。尊徳とは、25日の滞在期間中面会は出来ない。だが、転んでも、ただで起きることのない庄七は、聞こえてくる尊徳の講話や、来訪者や門人たちの会話、門人同士の話から教えを学びとった。

その教えは、「徳」とは簡単に言えば「人としての道を悟った善を行い」「品性」「誠」を言う。「報徳」はそれに報いること。すなわち協力して助け合う「相互扶助」にもつながっている。尊徳は、「一元融合」など、物事を「円」に見立てて捉えている。宇宙の万物はそれぞれが持つ「徳」を溶け合わせて「円」として共生し、成果を出している。道徳と経済は、一体のものでなければならない。物と心も、本来は調和すべきものだとしている。

そのやり方や進め方を「仕法」といっている。仕法には、「至誠・勤労・分度・推譲」がある。「至誠」とは誠実な心。人は「勤労」から学び自分を磨く。「分度」は、自分の置かれた

状況をわきまえ、慎み節約すること。「推譲」とは、節約して余った物を自分の子孫と他人や社会のために譲ること。そこが自分と違うところだと庄七は恐れ入った。

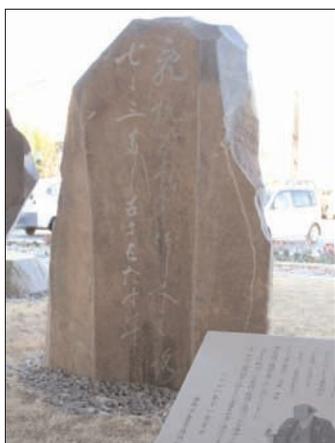
初めは、尊徳のことを金貸しの親方が元締め、山師などと想像していたが、借金に泣いている人々に無利子でお金を貸し、「勤労」に励み、「分度」を踏まえて生活を切り詰めることを教え借金を返済させている。余剰が出たら「報徳金」というお礼をする。このやり方で、食べ物もろくにない農民の生活を助け、農地を復興させ、村を生き返らせている。破産した武家の財政だけでなく、乱れた世の中を立て直している。そして、それを実践する指導者を育成しているというものだ。

人々に、その実践論や仕法で世のため人のために己の身を忘れて全精神を捧げている。なかなか立派な人物ではないか。庄七は、尊徳のそのような姿に心を打たれ、一度死んだ気持ちになって人生のやり直しを決意するのであった。

3 話し合い、助け合うこと、

協同の大切さを説く

「乱杭の 長し短し 人ころ 七に三た



JAはだのにある「乱杭」の歌碑

し 五に五たす
の十」この歌は、
庄七が毎日の生活の指導において、人々の教えを導く上で一番基本的な考え方を示したもので、庄七の代表的な道歌です。乱杭

とは、川辺に立てた杭。その杭には、長いものや短いものといろいろあって、川の水の流れ、水の量をうまく調整し、勢いをやわらげ



安居院庄七肖像

ることで、長短の杭全体が護岸や堤防を守る働きをしているという訳です。

人間は十の心が全般にわたって一番良いのだが、そんな人はいない。人の心は七つの心、五つの心、三つの心の人もいるだろう。人それぞれの思いや考え方、知識はいろいろ違って、お互いが理解し合い、助け合い、補い合うことで十の優れたものになっていく。すなわち、人は互いに理解し合い、助け合うこと、協同することで大きな力を発揮することができるという、今日の協同組合精神そのものの教えを説いています。

4 今の時代に生きる庄七の考え

協同組合は、「弱い一人ひとりが、手を組んで外圧からお互いを守り、自分たちの幸せを実現しよう」という組織であり世界中に存在している。その共通の精神は「一人は万人のために、万人は一人のために」でありヨーロッパで使われていたスローガンです。日本では、「共存共栄」、「相互扶助」などと訳しているが、これはまさに二宮尊徳や安居院庄七が指導した精神的・物質的・経済的な「助け合い」の精神そのものといえよう。

(みやなが ひとし)